

音楽学部・音楽研究科アナログ演奏記録デジタル・アーカイブ化
平成28年度 活動報告

昨年度、本学音楽学部・音楽研究科に過去の演奏記録がどのように残され、保存されているかの調査を行った。その結果を受けて本年は、その中でも緊急性の高い、アナログのオープンリール式テープ(以下オープンリールと略す)の演奏記録のデジタル化作業を開始した。

現在、本学音楽学部・音楽研究科にはオープンリール録音資料が約600本存在することが、昨年度の調査で判明している。その中でも古いものは1963年(昭和38年)のものであり、劣化が相当進んでいる可能性があるため、できるだけ早い対策が必要であると考え、今年度は資料整理や目録の作成には踏み込まず、デジタル化作業のみを行った。

約600本のオープンリール録音資料の中から、重要性の高いものとして定期演奏会、卒業演奏会、特別演奏会の記録約350本を、今後数年のうちにデジタル化し保存する予定である。まずはデータのデジタル化を優先するため、公開可能な音源ライブラリーや目録の作成などの整備は、デジタル化が終了してから取り組むこととした。

今年度作業が完了したのは1月25日現在で計82本であり、そのうち最も古いものは1963年11月6日に京都会館第2ホールにて開催された「弦楽合奏研究所第1回演奏会」の録音であり、最も新しいものは1975年3月24日に京都会館第2ホールにて開催された第4回卒業演奏会の録音である。なお、4月から9ヶ月かけて82本は進捗が遅いように感じられるかもしれないが、オープンリールの再生にはアナログ時代の状況を熟知した技術者による慎重な取り扱いが要求されることと、専門知識を持つ音楽家がすべての作業結果を等速で実際に検聴しなければならないので、年間80本から100本が限度であろう。すなわち、この作業には今後少なくとも2年から3年はかかることが予想される。

実際に作業を進めていくと、すでに再生不可能になっているもの(例:箱を開けてさわっただけでポロポロと崩れる)もあったし、再生は可能ではあったが、テープの変形による音揺れや転写によるノイズ等、音質に難のあるものもいくつかあった。しかし首尾よくデジタル化に成功した録音を全量検聴する過程には、なかなか興味深いものがあった。検聴では、あくまでデータがきちんとデジタル化されているかのみを、すなわち音質のみをチェックするのだが、データは実演奏芸術の現場の記録であり、検聴者も音楽家であるので、当然その演奏曲目や演奏内容にも関心を向けざるを得ない。約50年前に「大学の演奏会」で演奏されているレパートリーは現在のものとはかなり相違があることがわかり、過去50年間の本学演奏史をたどることによって、音楽専門教育内容の変遷の歴史をさぐるができるだろうと感じさせられた。これを音楽学的見地から検証することは非常に興味深い研究となるであろう。

また、50年前の本学の学生たちが繰り広げる演奏の熱さを知ることができたことも収穫であった。この半世紀で演奏技術も楽器の性能も、そしてホールの音響条件も著しく向上したのではあるが、50年前の学生たち(当然筆者よりも年上である)の演奏に感じられる音楽への愛情と情熱は、心を動かされずにおられないものであった。

この貴重な資料をきちんとした形で保管し、将来の研究への備えとすることは、大変有意義でどうしても必要なことだという思いを新たにさせられた次第である。

山本 毅(音楽学部教授)